

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

イタリアそろばんの旅③

* そろばん背負って西東 *

木下 和真

そろばんを指導するときの必需品に「大そろばん」がある。小学校の時に見たことがある人も多いと思うが、教師が使う大きなそろばんだ。「大そろばん」と呼ばれるだけあって大きい。そして、その大きさが難点である。



【大そろばん】

まず、かばんに入らない。その上、目立つ。イタリアの教室に大そろばんが用意されているはずもなく、持っていきしかない。今回は播州算盤の好意により、そろばん四十丁と大そろばんの寄

贈を受け、送っていただいたのでイタリアに着くまでは何ら問題は無かった。

けれど現地での移動時は大そろばんを自ら運ぶ必要がある。

一番頻繁な移動はヴェローナの中だった。週に二日、火曜日と木曜日は二つの学校で授業がある。まず中学校で三時から授業を行い、四時十分前に授業を切り上げる。小学校の授業は四時から始まる。この十分の間私は移動しなければならない。その距離約一・五キロメートル。移動手段は自転車だ。

問題は大そろばんを持って自転車に乗らなければいけないことだ。紙袋にでも入れ、かごに乗せれば簡単のように思うが、コラードさんが貸してくれた自転車にかごはついていなかった。その自転車、コラードさんの義理のお母さんが若いころに使っていたもの。かれこれ四十年は経つという。

イタリアについた初日、コラードさんに連れられて自転車に乗ってみた。止まろうと思い「ぎゅっ」とブレーキを握った。すると、プチンと音をたててブレーキのワイヤーが切れた。左手のブレーキで止まることはできたのだが、右のブレーキはまったく効かない。

コラードさんにこのことを告げると

「そうですか。では、自転車屋さんに行きましょう」

との答えが返ってきた。うん。もっともだ。

自転車屋さんで、修理を頼んでいる間にコラー

ドさんは言った。

「イタリア人は古いものを何度も直しながら使います。」

そういわれると、イタリアの街自体がそうかもしれない。ここヴェローナは町並みそのものが世界遺産だ。ローマ時代や中世の建物がそのまま残っている。外見は昔のままで、建物の中に入ってみると一転モダンな内装で彩られている。

「日本はどうですか？」というコラードさんの質問に、私はふと思いついた。

「その商品は古いため、もう部品がありません。新しいタイプのもを購入してもらう必要があります」

電気製品、トイレ、お風呂……何かが壊れる度にこのセリフを何度聞いたことか……

四十年前の自転車を前に、日本とイタリアの違いを痛感する。

また、イタリアの自転車環境は日本と全く違う。自転車は完全に車扱いだ。ここヴェローナでは自転車も車の一方通行に従わなければならない。この町の道路を理解していない私は、一つの場所になかなかどおり着けない。歩いてでも難しいのなら、一方通行のある自転車ならなおさらだ。時には大通りに出くわし、大通りの激しい車の流れの中を自転車に乗ったこともあった。ブレーキワイヤーが切れないことを祈りながら必死にペダルを漕ぐ。

そして、イタリアは日本と逆で車も自転車も右側通行である。頭では理解していても、体はついてこない。ふと気づくと自然と左側を走っている。車をよけるとときも体が左側に動く。長年の環境とは恐ろしいものだ。

イタリア生活事情はこれぐらいにして、そろばんの話に戻ると、大そろばんが大きすぎて紙袋にもリュックにも入らない。専用袋もない。ならば最後の手段。縄で縛って担ぐという方法に出た。リュックを背負い、その上に縄で縛った大そろばんをさらに背負う。ちなみに大そろばんは真黄色。目立つこと、この上ない。

初日はきっちり三時五十分中学校の授業を切り上げ、自転車に乗った。移動時間は十分のみ。道路の右側を走り、小学校に向かう。途中めずらしそうにこちらを見ている人がいる。しかし、恥ず

かしいなんて言ってもらえない。四時から授業が始まるのだ。

なんとかして、四時五分前に小学校へたどり着いた。さあ、授業だ。私は思った。けれど、教室に子供たちはまだ来ていなかった。やがて四時になり子供たちがやってきた。そして、授業が始まったのは十分ほど過ぎてから。さすがイタリアのんびりしたもの。焦っていたのは日本人の私一人だったようだ。



【とある駅の風景】

そろばんを背負っての移動はヴェローナだけではない。今回の旅では、ベルガモ・ポローニャ・ヴェネツィア・ミラノと四都市で講演を行った。移動はすべて列車。荷物が多いのが難点だ。

まずリュック。これだけでも重い。そろばんの講演では必ず暗算を披露する。読み上げ暗算でもいいのだが、やはりフラッシュ暗算(※1)がいい。暗算のすごさが一目瞭然だからである。しかし、フラッシュ暗算をするためにはパソコンが必要となる。リュックの中のノートパソコンは一般サイズ。一言「重い」。お金をけちって、薄い軽量タイプを買わなかったことを後悔する。

中には朝8時からの講演もある。朝にヴェローナを出たのでは間に合わない。宿泊の必要がある。泊まるとなるとそれなりの準備が必要だ。汗だくのワイシャツで授業するのはさすがにまずい。日本の旅館のように浴衣があるはずもない。荷物が一回り大きくなる。

左手には紙袋に入ったそろばんの山。できるだけ多くの人にじかにそろばんに触れてもらいたいという一心で三十丁のそろばんを持って行った。そろばんも三十丁になるととにかく重い。

そして、最後にリュックの上から大そろばんを

担ぐ。

移動時間は短くない、時間を持って余すことの無いよう、文庫本をポケットにしのばせる。私だけかもしれないが、海外での移動中は読書にうってつけだ。日本国内で読む以上にページが進む。感動も増幅される。日本語に飢えているせいなのか、一人旅の寂しさががそうさせるのか、はたまた、この重い荷物のせいなのか、涙がぼろりと頬を伝うこともしばしばだ。

これだけの荷物で列車に乗り込むと注目されること間違いない。私は決して目立ちたいわけではないのだが、大そろばんが「こっちを注目して」と大声を上げている。誰もが物珍しげな顔でこちらを見る。中には「これは何だ？」と聞いてくる人もある。そんな時は、日本の伝統的な計算機だと答える。すると、どうやって計算するのだと話が進む。簡単な講義の始まりだ。これもイタリア語の実践だと思い説明をする。何度も同じ説明をしているので、すらすらとイタリア語が出てくる。説明が終わると世間話になる。そうなるともうお仕上げだ。まるでわからない。イタリアについての当初は、そろばんの説明はイタリア語でできても、旅行の基本表現である「これいくらですか？」という表現は知らなかった。イタリア語ができないと察すると、話は終わる。もともとそろばんに興味があるわけではない。ただこの不思議な物体の正体を知りたかっただけなのだ。

そして、驚いたのが多くの人が大そろばんを見て、

「Che bello!(わあきれい)」

と言うことだ。何がきれいなのだろうか？ 目立つ黄色？ それとも整然とそろった珠の並びだろうか？ 実際の大そろばんを見て「Che bello!」と言った人はいなかったの、色と大きさが「きれい」と言わせたのかもしれない。そうすると、それは本来のものではない……しかしファッションとデザインの本場イタリアで「きれい」と言われるのも悪くはない。

このように大そろばんを背負っての移動はとにかく目立つ。だが、これもそろばんのPR活動。移動を繰り返すにつれ多少の恥ずかしさはあれど、イタリア人の心の中に少しでもそろばんが刻まれればと思うようになっていた。

しかし、ひとつだけ、そろばんを隠してしまいたいと思わせる都市があった。世界屈指の観光地ヴェネツィアだ。

ヴェネツィア大学で講演があり、サンタルチア駅に降り立ったのだが、一歩街に出た途端、雰囲気は他の都市とは全く違う。

さすがヴェネツィア！

日本人観光客も多い。そろばんを背負っている姿を日本人に見られるのはやはり恥ずかしい。おまけに会おう人出会う人、皆若い二人連れだ。そう、イタリアは新婚旅行のメッカなのだ。イタリアに来てヴェネツィアを訪れない新婚カップルなどいない。



【ヴェネツィア】

水路に揺れる gondola を眺めながら愛を語り合う二人。

その横にいる、黄色い大そろばんを背負ったひとりの男。

だめだ。それだけはだめだ。

少しでも早くその場を逃れたい一心で、ただでさえ狭いヴェネツィアの路地の、さらに狭い道を選び、そそくさと講演会場に向かう私だった。

(※1)パソコンの画面に連続して現れる数字をすべて足していき、合計を求める暗算。

(当館語学受講生)

RiITALIA -イタリア再発見-

第5回 『BRAVO Dalla!』

国司 航佑

筆者は、おおよそ15年前にイタリアで1年間高校に通い、その3年後10ヶ月あまりの期間をフランスで過ごした。イタリア留学においても、フランス留学においても、帰国する頃には、その国の言語を、日常会話をこなせる程度には習得していたと思う。今となってははっきりと覚えていないが、話せるようになるまでにはそれなりの努力をしたに違いない。が、本当に努力を要したのは、実は留学中ではなく留学が終わってからであった。同じような経験をした方は分ると思うが、第二言語の知識というものはかなり脆弱である。短期間で身に付けたものは、短期間で失われるものだ。

筆者の場合、大きな問題が生じたのはフランス留学のときだった。留學生活を始めて3ヶ月ほど経った頃だったろうか、フランス語の会話も少しだけスムーズになってきた頃、あるイタリア人と知り合いになった。そして、偶然そのイタリア人と街角ですれ違ったときに、事件は起きた。“Tutto a posto?” 彼が何気なく話しかけてきたイタリア語に動転した… “Oui,, mais sì.” (ハイ…ソウデハナクテ、はい(※注:カタカナの部分はフランス語、ひらがなの部分はイタリア語))。彼は、筆者の動揺を意に介せず続ける… “Che si dice?” (最近どう?)、 “Cosa stai combinando?” (何してんの?)。筆者の動揺は頂点に達する… “Sì, rien, cioè niente... ma il mio cervello...une catastrophe!” (うん、何ヲシテイルッテワケデモナク、じゃなくて、何をしているって訳でもなく…ただ、私の頭は…コンガラガッテイマス!)。そう、フランス語会話を習得すると同時に、筆者はイタリア語を話せなくなっていたのである。せっかく一度話せるようになったのに、これでは勿体ない。決意を新たに日本に帰国した筆者は、それから8、9年の間、特殊な方法で語学の勉強に取り組んだ(日曜日から水曜日まではイタリア語を使う日、木曜日から土曜日

まではフランス語を使う日と決めて、一週間を二分して生活する日々を、数年に渡って過ごした!)。結果、現在では、普段イタリア語を使う機会の方が圧倒的に多いのにも拘らず、フランス語もなんとか喋ることができる。

さて、こうしてイタリア語とフランス語の間を行き来しているうちに、筆者はあることに気付いた。それは、この二か国語は文法体系や単語などについて多くの共通項をもつにも拘わらず、どちらかの言語だけでしか言えない表現が多数存在しているということである。例えば、イタリア語を話しているときに、不意に、“Est-ce que”という表現を使いたくなったりする。“Est-ce que”は、フランス語で、疑問文の前に置いてそのフレーズが疑問文であることを示すために使用する言回しである。ちょっと小難しい内容の質問をするとき、“Est-ce que”と先に言うておくと、文章を構成するための時間を稼ぐことができる。筆者がフランス語を話すときにもしばしば使う、まことに便利な表現である。しかし、困ったことにイタリア語にはこれに相当する表現はない。イタリア人は質問する前に少し考え込んだりすることがないのだろうか…。

一方で、フランス語ではどうしても言うことができないが、イタリア語には存在しているような表現もある。それは例えば、“bravo”という形容詞について言える。こんなことを言うと、いやいやフランス語にも“bravo”に相当する言葉があるじゃないか、と反論されるかもしれない。たしかに、“brave”という単語は存在しているし、それはイタリア語の“bravo”と同じ起源を持っている。しかし、この二つの語の意味は、実は大きく異なっている。“bravo”が、《①優れた、優秀な…②しっかりした、いい子の…③(文)勇敢な④(親)十分な》という意を持つのに対して、“brave”の方は、《①勇敢な、勇ましい②善良な、人のよい…》を意味する(“bravo”については伊和中辞典を、“brave”についてはプチ・ロワイヤル仏和辞典を、それぞれ参照した)。つまり、単に賞賛に値すべき物を称えたいとき、“bravo”の方は気楽に使えるが(これに近い意味・語法をもった単語を日本語のうちに探すならば、「すごい」という形容詞が見つかる)、“brave”の方はそうはいかないのである。だから、フランス語で“bravo”に相当するような表現をしようすると、なかなか上手いれないのである。



【『いいなづけ』より、“bravo”たちが登場するシーン】

(wiki.it “Bravi”より)

これと関連して興味深いと思われるのは、“brave”の第一義と“bravo”の第三義(文語)の意味が一致しているという事実である。つまり、フランス語においては口語としても健在する「勇敢な」という意味は、イタリア語においては文語に押しやられてしまっているのである。これは一体、どういった訳だろうか。実は、イタリア語の“bravo”は、少し前まで、現在のような使われ方をしていなかったようである。19世紀末に Tommaseo と Bellini によって編纂された辞書によれば、“bravo”は、「腕力・胆力に秀でた。肯定的な意にも否定的な意にもなる」という意、つまり現在のフランス語にかなり近い語義をもっていたのである。古今の文学作品における使用例を掲載した UTET 社出版の大辞典を試みに引いてみると、やはり第一義は「勇敢な」ということになっている。この意味での使用例にはかなり古いものもあり、「野蛮な」という否定的な意味合いで使われていることもしばしばである(有名なのは、イタリアの国民的作家マンゾーニの代表作、『いいなづけ』に登場する“bravo”で、これは「ゴロツキ」といったような意味合いを含む名詞である)。一方で、「優れた」という意味は、第三義に位置づけられており、その使用例の多くは近代以降のものである。筆者は言語学者ではないので、語源に関してのこれ以上の議論は止めておく。だが、もともと「勇敢な」という

意味の単語が近代以降「優れた」という意味をもつようになっていったという推移の仕方は、なかなか示唆的である。少々のミスを許してでもチャレンジすることを推奨するという、イタリア社会の特質を象徴しているようでもある(もちろんこれは、単なるこじつけである)。

さて、「ミスを恐れるな」という文句は、日本でもよく耳にする陳腐なセリフかも知れない。が、イタリアには、そのようなメッセージを美しく叙情的な詩句で表現した有名なポップソングがある。国民的カンタウトーレ(イタリアでは、シンガーソングライターのことをカンタウトーレと呼ぶ。日本におけるフォークシンガーに相当する)、フランチェスコ・デ・グレゴリーの“La leva calcistica della classe '68”(‘68 年生まれサッカー集団)がそれである。ピッチに照りつける太陽、巻き上がる砂煙、主人公ニーノの登場、彼の心に募る不安。こうした状況を歌い上げたあと、次のようなサビが始まる。“Nino non avere paura di sbagliare il calcio di rigore. Non è mica da questi particolari che si giudica il giocatore. Il giocatore lo vedi dal coraggio, dall'altruismo e dalla fantasia”(ニーノ、PK が外れるのを恐れる必要なんてないんだよ。サッカー選手の価値は、そんな些細なもので決まるんじゃない。大事なものは、勇気、他の選手を思いやる気持ち、そして想像力だ!)。筆者の拙い訳で伝わるかは怪しいものだが、サッカー経験者ならば、いや大きな舞台を前にして尻込みした経験をもつ人間なら誰でも、感動せざるをえない素敵な歌詞である。



【『マラケシュ・エクスプレス』の一シーンから】

(wiki.it “Marrakech Express”より)

先ほど、この歌が有名だと述べたが、それは、デ・グレゴリーの作品だからというだけではない。映画監督ガブリエーレ・サルバトーレスの代表作、

『マラケシュ・エクスプレス』の劇中挿入歌の一つだからでもある。サルバトーレ監督は、他にも、アカデミー外国語映画賞の受賞作『エーゲ海の天使』や最近のヒット作『ぼくは怖くない』でも有名だが、この『マラケシュ・エクスプレス』は、特に筆者の気に入った作品である。サッカーのチームメートでもあった親友 5 人組が、ある事件をきっかけに 10 年ぶりの再会を果たし、共にモロッコのマラケシュを目指して旅を始める。モロッコで現地人とサッカーの試合をする場面では、デ・グレゴリーの“La leva calcistica”がBGMとして絶妙な効果を発揮し、映画史に残る名シーンを作り上げている。筆者は、コメディタッチの明るい基調の布地に、メランコリックな心理描写が滲み出てくるような作風でこそ、イタリア映画の真骨頂が発揮されるのではないかと考えているのだが、この映画こそはまさにそれを体現する作品である。フェッリーニやパゾリーニなどの作品に比べれば知名度は劣るが、『マラケシュ・エクスプレス』のような作品も、個人的にはもう少し評価されてよい気がする。



【ルチョ・ダッラ】

(ultimaora.net より)

勤の鋭い読者は既にお気づきになったかもしれないが、筆者は最後に話そうとしているのは、ルチョ・ダッラについてである。ダッラもまたイタリアを代表するカンタウトレーであるが、実はそのダッラは、先日、惜しまれながらもこの世を去った。サン・レーモ音楽祭にピエロダヴィデ・カローネと共に出演したあと、一週間も経たないうちの訃報であった。当時、EU の危機が連日ひっきりなしに報道されていたのだが、その夜はほとんどの報道番組においてダッラ逝去のニュースがトップニュースとして紹介された。ダッラの存在がイタリア人にとって如何に重要なものであったか、よく分かる。筆者もまた、過去にダッラのコンサートに行こうと思って結局止めにしたことがあったので、殊更これを悲しんだものだ。さて、そのダッラの代表作、“L'anno che verrà”(来る年)は、例の『マラケシュ・エクスプレス』のもう一つの挿入歌であった。“Caro amico ti scrivo. Così mi distraigo un po'.”(親愛なる友よ。手紙を書きます。そうすれば、少し気も紛れるかもしれませんが。)という出だしは、イタリア人なら誰もが口ずさめるという程に有名である。陽気な曲調とシュルレアリスティックなフレーズの合間に、現実社会の憂鬱が浮かび上がってくる。この曲が『マラケシュ・エクスプレス』の雰囲気と合致しているということは、余計な分析をしなくても分かることだと思う。月並みなセリフかもしれないが、本当に惜しい人を亡くしたものである。天に向かって“Bravo Dalla!”と絶叫しつつ、この辺で筆を置くことにしよう。

(元当館スタッフ)

… 会館 だ よ り …

カンツォーネ講習会

- ・日時: 6/ 8(金) 14:00~16:00
6/15(金) 14:00~16:00
- ・会場: 日本イタリア京都会館 本校
- ・費用:
2 回分一括 維持会員 4,000 円
 受講生・一般 5,000 円
各回 維持会員 2,500 円
 受講生・一般 3,000 円
- ・定員: 30 名 先着順
- ・講師: 山本隆子(ソプラノ) 他

標準イタリア語の“戸惑い”

- メルボルン大学のアンドレア・リッツィ博士による標準イタリア語成立以前の言語環境にまつわる講演会です。
- ・日時: 6/9 (土) 16:30~18:30
- ・会場: 日本イタリア京都会館 本校
- ・費用: 維持会員 500 円,
 受講生・一般 1,500 円
- ・定員: 40 名(先着順)

- ・講師: メルボルン大学人文学部
 アンドレア・リッツィ博士
- 注: リッツィ博士の講演は日本語同時
通訳あり。(質疑応答は英語でも可)

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/